

# 惚けたおばあちゃん

香長中学校2年  
山本美佳

法務省と全国人権擁護委員連合会が募集していた「全国中学生人権作文コンテスト」の審査結果が発表され、三十八万編の中で、高知県からは優秀賞に香長中2年、山本美佳さんの作品が選ばれましたので、紹介します。

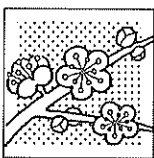
私の家には、足の不自由な瘦たきりの祖母がいます。今年七十八歳、今はもう、すっかり惚けてしまっています。  
私はひまさえあれば、話し相手になるのですが、その祖母の話すことは、もうこの世にはない祖父のことばかりです。「おばあちゃん、おじいちゃんはどうなっちゃった」「おじいちゃんはその部屋におるじやいか」私はいつも驚

いてあたりを見回します。でも、この世にいない人をどうやって捜せばいいのでしょうか。思わず、熱いものが胸にこみあげてきます。それでも気を取り直して、「そう、けんど、その部屋、誰もおらんぞ。おじいちゃん、どっかへ行ったろうかねえ」と話を合わせます。「そうかえ。ほいたら山へでも行つたらう」祖母はすましたものです。こうなると、もう私にはこたえる言葉もみつかりません。

いつか、こんなこともありました。弟の悲鳴に似た叫び声で、父と母がとんで来たとき、祖母は廊下から、歩けない足をぶらぶらさせて、地面を這っていました。一人で外へ出ようと部屋からはい出したのでしよう。弟の気づくのももう一瞬遅れていたらと、ぞつとしたことでした。  
私たちが家族のことを覚えてくれる、いや、ときたま、突然に、私たちのことを思い出してくれた当時は良かったのです。今では、私に向かつて「おまん、ごこの子ぞ」

と問いかけるありさまで、実の息子である父と叔父の区別までもつかなくなつてしまいました。「おまん、最近ごぶさたしちよったねえ。まあ、どこへいつちよった」そのときの父の姿が忘れられませんが、父は「そうかよ」と言つたばかりでした。やがて、父のあの広い背中が揺れて、くずれて、また揺れて泣いていました。母も泣きました。弟も、そして私も。  
新学期になつて間もないころ、幼い弟はこの夏休みはどこにも遊びに行けなかつた、ぐちをこぼしました。「おばあちゃんがおるきねえ。行きとつてもどこつちやあ行けんけん、がまんしちよつてよ」と、すまなきさうにさとす母が哀れでした。ピーマンとじしとうのハウス栽培の激しい労働、赤字続きの家計のやりくり、その上に、朝早くから炊事、洗濯、掃除に追われ、祖母のおむつかえやら身の回りの世話を、すべてやらなくてはならない母、夜は夜で、決まって騒動を起こす近所迷惑な祖母をなだめすかす母、その苦しさをやつらさは、弟にもわかつているのですが……

私の家に不幸がやってきたのは、あの日からです。今年の二月二日夜のことでした。元気に歩き回っていた祖母が、おしつこに起きて転び、腰の骨を折つてしまいました。それから祖母の入院生活が始まりました。母の病院通いは、いつか、病院づめになりました。母と祖母のいない食事はさびしいものでした。父のお酒の量も増えました。そういう心配が、一生懸命に耐えている母をいつそう困らせました。私と弟が初めて病院に行つたとき、わずかの間に、祖母の姿は変わつていました。身体の内がぞけたように落ちて骨と皮になり、髪もまっ白になつていました。「美佳に義人、お母さんがおらん間、えい子にしちよった」と祖母は泣きました。「私たちは「うん」と答えたものの、祖母のあまりの変わりように、しばらくは口が思うように動かせませんでした。それから間もなく、祖母の惚けが始まつたのでした。「そこに美佳と末廣がきてくれちゆう」父も私もいなのに祖母は口走つていたそうです。家族に会いたい一心からそう見えたのでしょうか。もつと私たちが祖母に会つていたら、もつと祖母に話しかけていたら、家族を忘れることも、惚けることもなかったのではと、思われてなりません。



## 人権週間記念 講演会から

### 部落の母として、 人間として

谷添美也子氏（主婦・宝塚市）

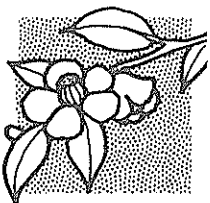
私は地区に嫁いで十五年になります。地区内、地区外の人にとつて、私たちの結婚は例外的なこととして受け取られることが多いのです。それは周りのどなたからも、反対を受けていないからです。  
夫は交際して二年くらいにして、部落であることを告げてくれました。私にはショックでもなかったし、構えるつもりもありませんでした。私は小さいころから、母から部落について聞いたこともなかったし、反対もなくすんなり結婚しました。友達で反対された人も知っていましたが、自分の問題としてとらえていませんでした。だから反対している親は「何と無理解なんだなあ」としか、たゞそれ



くらいにしか考えていなかったのです。今でしたら、結婚でこの問題は解決できたと言われますが、私にとつては、結婚からがこの問題のスタートでした。  
今まで他人事であったことが、地区に嫁いだことで、我が身のこととしてやつと考えられるようになったのです。最初は、地区の人は言葉遣いが悪いと耳に入つたならば、我が子が絶対に言われたいように育てようとか、意地ばかりで子育てをしてきた部分があったように思います。  
今中学三年生の長男が小学校へ入学し、授業参観日の懇談会のことでした。今まで私は、地区という何が何の障害にもならないと考える人が大部分であり、差別意識を持つていたのは、ごくわずかだろうと思つていました。しかしそれはまるで反対で、懇談の中では頻りに差別的な発言が出るのです。そこでやつと、日本の社会の

中で、同和地区の人々がどのような状態に置かれているか、その厳しい立場を認識できたほど、のんきな私でした。  
そんな私が、PTA会長をしていただくときの報告会で、参加者の方から「悲しい子育てをしていますね」と言われたのです。子育てに悲しい子育てでなると、思つてもみながつた私です。またあるとき、同和学習講座の中で地区のお母さんが「私は、子供が地区だからと言われないうちに、いっしょうけんめい働き大学まで出させ、近所でも性格の明るい素直な子と言われているんです。それが結婚差別に会い、何度恋愛しても成立しないのです。現在女性不信に落ち入り精神科の手助けを受けています。いったいこの子は後、何を努力したら部落落という肩書きを外してくれませんか」と、おっしゃるんです。  
そのとき、私はわかりました。今まで私は、差別する原因は、差

別する側が悪いのであって、努力すればなくなるものだと思ひ込んでいたのです。  
長男が小学五年生のとき、部落のことについて話そうと主人に聞いたとき、主人は「言う必要はない。自然とわかるもんだ。子供はどう思う。お母さんは地区ではなく、ぼくが言われるのはお父さんのせいだと言われたら……」と。そのとき、主人の涙を見るのは初めてでした。日ごろは減らず口を言う私ですが、一言も言えませんでした。  
それから数カ月後、主人も「いっつべん言つてみたい」ということで、子供に告げました。十日ぐらいたち、子供にその気持ちを書いてもらい、幸いに親が思つていたよりショックはなかつたようでした。  
子供に打ち明けてから、主人はポツリポツリと、子供のころに受けた苦しみを話すようになりました。しかし、主人が子供のころに受けた心の傷は、私にはどうにもならないように思います。  
私は、重度身体障害者へのボランティア活動にもかかわつてきましたが、そこで学んだことは「生命はいつもみんな等しくて、どんな状態の人間でもすばらしい」ということです。障害者問題も同和問題も突き詰めたら、相手の立場に立つて考えるかどうかです。



最近になつてやつと、同和問題は個人の問題ではなく社会的問題で、一人の努力でどうなるものではないことを、遅ればせながら認識することができました。私は、一人でも多くの人に接して、理解のある親になつていただくよう、そういう働きかけをするしかできないのではないかと思つています。行政ばかりに任せていたのでは、やはりだめです。  
同和問題というと、皆さんは難しいとおっしゃるかも知れませんが、決して難しくはありません。人が難しくしているものであつて、本当は簡単なんです。差別されている側になつて一度考えてみれば、どうすればよいかわかります。  
皆さんの子供たちにも結婚問題が上がると思いますが、そういう話がありましたら、今までの部落感が間違つていないことを、一言添えることができる理解者の一人になつていただきたいと思います。